

金 桂英「日本での留学生活で実感した『絆』の大切さ」

私は、青森県の弘前大学で、2006年4月から2007年3月までの1年間、交換留学生として貴重な経験をさせてもらったことがある。7年経つ今も、弘前での留学経験は、私にとって留學生生活の支えになっている。現在、私は東京で留學生生活を送っている。弘前とは違って多くの外国人が住んでいる東京では、不法滞在の外国人やそれに伴う犯罪も増えつつある。このような状況の中、東京で生活している外国人は日本国民の心の中でどのような存在なのか、果たして東京での留學生生活において日本国民との間に「絆」は生まれているのかと、疑問を感じることもあった。

2011年3月11日、大地震と津波が日本列島を襲った。私が地震に遭った直後、最初にかかってきた電話は弘前のホストファミリーのお父さんからだった。「エイちゃん、大丈夫か。余震が続くから、机の下に入っとくんだよ。電池がなくなるからママと娘に連絡するね」それだけ伝えて、電話を切った。ホストファミリーのお父さんは自分の奥さん・娘よりも地震の経験が乏しい私に最初に連絡したのである。その時、ホストファミリーのお父さんは海にいた。渡船業を営むお父さんは、この日も一人で漁に出ていた。沖合30分くらい進んだところで異常を感じたお父さんはラジオで災害が発生したことを知り、私にいちばん早く連絡したのである。地震が収まった後も、お父さんから「地震をあまり体験したことがないエイちゃんが本当に心配だった」と改めて聞かされた。お父さん以外にも、地震が起きた後、研究室の仲間、アルバイト先の先輩や後輩、岩手・福島など甚大な被害を受けた地域に住んでいる友達から、数多くの安否確認のメールや電話をいただいた。メールや電話から、心の奥から溢れ出てくる心配を痛感でき、みんなとの強い「絆」を改めて感じる事ができた。

今回の地震を経て、東京に来てから果たして日本国民との間に「絆」は生まれているのかと疑問に思った自分が恥ずかしくなった。日本のホストファミリーや友人の意味、大切さ、自分は一人ではないこと、私と日本国土・日本国民の間には、すでに断つことのできない強い「絆」が形成されていることを痛感した。また、大きな津波被害を受けた東北・太平洋沿岸地震に対し、世界各国からの支援の表明や、お見舞い、激励のメッセージが相次いでいることをニュースで知った瞬間、国境を乗り越えた「絆」の大切さを実感した。

しかし、最近、日本においても、中国や韓国との歴史的な見解の相違が、国境を越えた「絆」

に支障をきたすことが顕著になってきたのではないだろうか。80年代から国際交流を強調してきた日本にとって、外国人との触れ合いの中で「絆」をどのように生みだし、どのように強めていけばいいのか、明確に答えを出せないでいるのではないか。こうした流れを受けて、私は、日本が国際交流を通じて国境を乗り越えた「絆」を強めるために、更なる努力が必要な時期に来ていると考える。

その中でとりわけ存在感を増しているのが、日本語教育だと感じている。日本人が日本に住んでいる外国人の言葉を勉強することも大事だが、いかにして一人でも多くの外国人に日本語を学んでもらい、一市民として日本という大きな地域のなかに参加させるかが、現実的な課題となっている。日本に住んでいる外国人の中で、比較的が多い中国からの留学生として、私自身が、日本語教育の現状を把握し、日本語教育を発展させることは大変意義深いものだと考えている。私は日本での留学生生活を終えた後、中国で日本語を教えながら国際交流を促進する活動を行いたい。その時、私が日本での生活において学んだ経験と知識を生かすことができれば、幸いである。